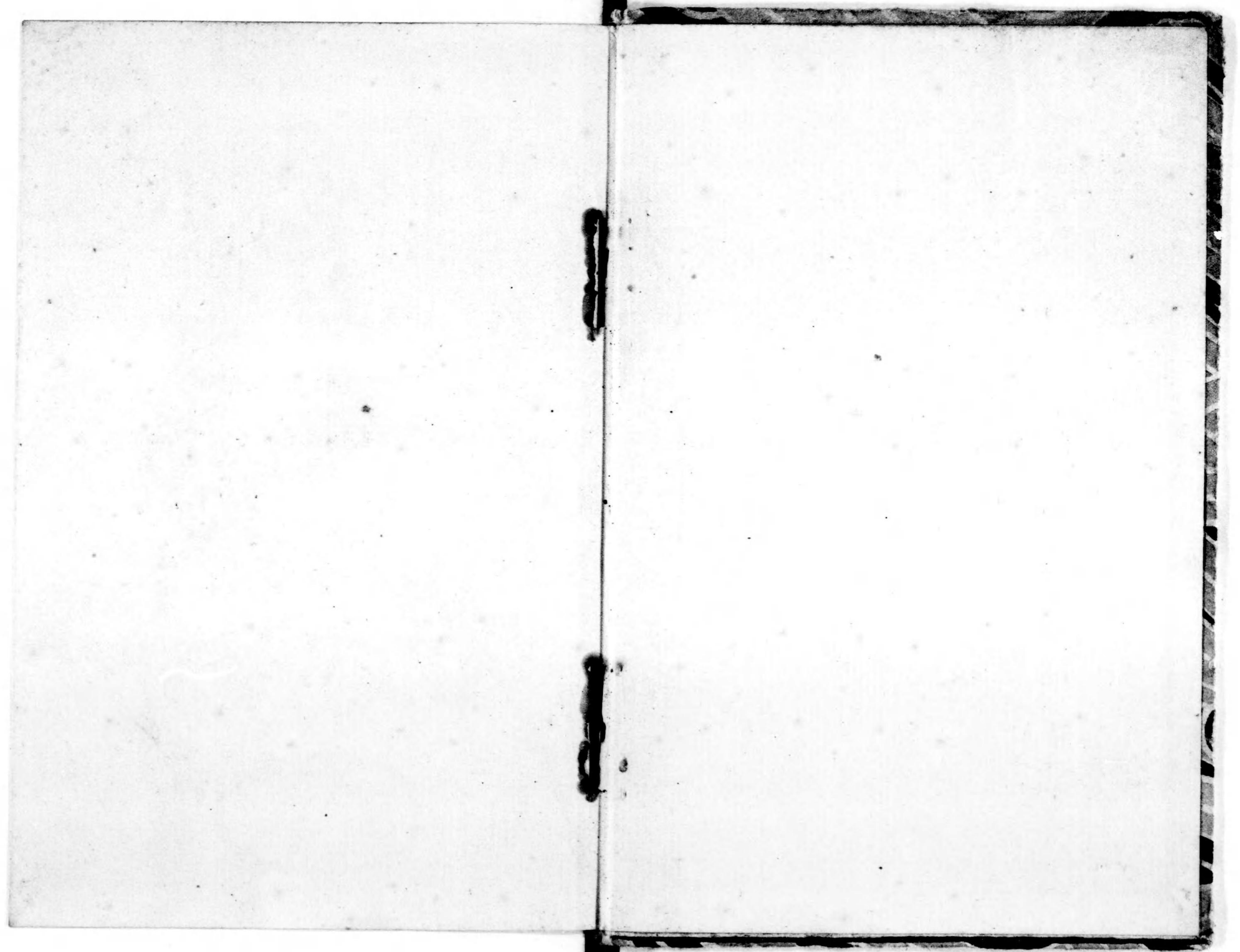


始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁶/₇₀ 1 2 3 4 5





持100
341



都會
と
田園

大正
8.6.12
内交

都會と田園

野口雨情詩集

東京 銀座書房出版

大正八年六月

鈴木善太郎装幀

空の上に、雲雀は唄を唄つてゐる
隅を巻いてゐる太陽の
光波なみにまかれて
唄つてゐる――

序
詩

目次

時雨唄	……………	(九)
曲り角	……………	(一二)
柿の木のエピソード	……………	(一四)
曼陀羅華	……………	(一七)
二人	……………	(二〇)
家鴨	……………	(二二)
深淵	……………	(二五)
生姜畑	……………	(二七)
酒場の前	……………	(二九)

忠義の犬……………(三五)

小さな出来事……………(三九)

蝙蝠……………(四一)

縁側……………(四四)

わしの隣人……………(四六)

彦兵衛

お霜

留さん

お艶

六藏

米松

娘と劉さん……………(五五)

磯の上……………(五九)

百姓の足……………(六二)

手……………(六五)

畑の中……………(六七)

山火事……………(七〇)

己の家……………(七三)

一 その頃

二 篠藪

三 霜の朝

四 何處へ

五 暗い心

六 風が吹く

都會と田園

七 丁 爺
八 頼 白
九 猫 よ
十 夏

時 雨 唄

雨降りお月さん

暈下され

傘さしたい

死んだ母さん、後母さん

時雨の降るのに

下駄下され

跣足で米磨ぐ

死んだ母さん、後母さん

柄杓ひしやくにざぶく

水下され

釣瓶つりびんが重くてわがらない
死んだ母かさん、後母あとかさん

親孝行おやうやうするから

足袋たび下され

足あしが凍こえて歩あげない
死んだ母かさん、後母あとかさん

奉公ほうこうにゆきたい

味噌みそ下され

咽喉のどに御飯ごはんが通とらない
死んだ母かさん、後母あとかさん

曲 り 角

銀行員のFさんは

新しい春廣を着て——大足に出ていった

黒いソフト、光る靴

暖い日の

午前九時頃

曲り角でパツタリ

A子さんと行き逢つた

(オヤー! オヤー!)

すらりとした——

桃割れ、白い歯

Fさんの顔

A子さんの眼

(オヤー! オヤー!)

二人はすれ違ふ

胸の動悸

柿の木のエピソード

春戸の畑の柿が赤くなつて來ると毎日鳥が集つて來て喰つてゐた

子供に番をさせて置いても
鳥は毎日來た

親父は洗濯竿の先へ

鶏の羽根をぶら下げて

柿の木の傍へ

立てて置いた

鶏の羽根が

ふわ／＼動いてゐる

鳥は遠くから見ても

來なかつた

時折、別な鳥が來ても

鶏の羽根が動くところに飛んでゆく

親父も子供も

安心して喜んでゐた

一晚風が吹いた

朝の暗い内から柿の木で鳥が鳴いてゐた

洗濯竿が畑の中に倒れてゐる
子供は駈けて来て親父おやぢに咄した

曼陀羅華

何處から種が飛んで來たのか

畑の中に

曼陀羅華まんたらかげが生えてゐる

百姓は

抜いて捨てようと思つてゐる中に

夏が來た

曼陀羅華まんたらかげは

葉と葉の間あはひから

白い花を咲かうとしてゐる

百姓は

花なんか咲かせて置くもんかと
ひとごと 獨言を云つてゐた

たうとう秋になつて了つた

曼陀羅華の花は

すつかり實になつてゐる

百姓は憤つて——手をかけるぞ

皆んな實は畑の中へ

ばら／＼はちけて飛んだ

二 人

歳の暮れも押し迫つて來てゐるのに
間借りしてゐる二人は
これからさき、どうすればいいのか
途方にくれてゐる

二人は

小さな火鉢を中にして

痛切に——お互に——暮しませうと云つてゐるが
矢張り涙にくれてゐる

二人は

昨夜も、同じやうな夢を見た

銀貨だの、米だの、肉だの、炭だの
風は屋根を鳴らして吹いてゐる

家 鴨

うしろの田の中に家鴨の子が
田螺たじを拾つて喰つてゐると
雁が来た

一所に連れてつてやるから
勢一杯翼せいつぱいはねをひろげて飛んで見ろと
雁かんが云つた

家鴨の子は一生懸命飛んで見たが
體からだが重くてばかりく落ちて了しまふ

雁は笑ひ笑ひ飛んで行つて了しまつた

家鴨の子は泣き泣き小舎こやの前に歸つて来た
親家鴨おやあしるは
桶の中へ首を入れて水を呑んでゐた

子家鴨は
別な良い翼はねをつけて呉れろと
大聲おほこゑで泣いてゐる

親家鴨は仕様なしに
そつちの方ほうを向いて

聞えぬ振りをしてゐた

深淵

ヨイトマケ

ヨイトマイタ——と深川の道路ツ端はたに

印しるし絆はんてん纏まとを着た

女の聲が唄つてゐる

砂塵を捲いてタクシーは

軋こき殺すほどの勢ひに——人々はどやくと

街路樹の下に

右に左まに避けてゐる

下町したまちの深淵ふかふちの中に沈しずんでゐる

力のぬけた、だるい顔

ガソリンガソリンのむかつく臭にお気き嗅かぎながら

女の聲こゑは唄うたつてゐる

灰色灰色の中に住すんでゐるLABORERの——聲こゑは次第しだいに疲つかれ

てゐた——印いん袴はかま纏まとの女おんなの聲こゑは疲つかれてゐた

冬ふゆの日は

一間いっけんばかり残のこつてゐる

生 姜 畑

枯かれ山やまの芒すすきア穂ほに出いてちらつくが

帯おびに襷たすきにごつちにつかず

赤あかい畑はたけの唐から辛しん

石いしを投なげたら二ふたつに割われた

石いしは積かんで

光ひかりつてる

安やすが嬬かの連つれッ子は

しよなりく〜と

もう光る

生姜畑しやうがはたけの闇の晩

脊戸へ出て来て

光つてる

酒場の前

特殊部落とくしよぶらくの——若い娘のお喜乃

少ちうども人すれしないほんたうに美い綺縹のお喜乃
先刻さつきからぼんやり、酒場の前に立つてゐる

お喜乃よ

もう晩方だ、家うちへ歸つたら良いではないか

酒場の暖簾のれんから年配ねんばいの男が首を出して云つた

アイ、歸るよ、だかな伯父おぢさん

権けんさん今日は來こなかつたか

年配の男は權と同じ工場ふるひしよくこうの古參職工だ

黄昏たそがれの風に吹かれて職工の群むれは歸つてゆく。

權か、來こない、來こない

ありやあなア、お喜乃よ、權はもう大坂へ歸るんぢや

知らん、知らん、そんなことない

伯父おぢさん、お前うそ嘘だらう

お喜乃は暖簾そだの傍へ寄つて來た

おぬしに、嘘うそ云つてどうする

お喜乃よ、權はなア、工場から暇ひまが出たんだ

お喜乃はすり寄つて年配の男の顔を見凝みつめた

伯父さん、そりやアほんたうか

年配の男は黙だまつてお喜乃の顔を見てゐる。

酒場の中からざんたり／＼話聲かたが聞えて來る

空樽たに腰を掛けて冷酒ひやをあふつてゐた

目の苦茶々々した淺黄服あさきを着た男が

微醉せろそひき機嫌げんで酒場の中から出て來た

オ、お喜乃か、ウム、美しい綺縹いだな

オイ兄あにえ(年配の男に)己おらア一足先ひとあし歸けるよ

千鳥足で行つて了つた

ホ、權が來だ！

年配の男は、向ふを見ながらお喜乃に顯でしやくつた
權はひよつこり酒場の前にやつて來た

お喜乃は駈け寄つて權の手を握つた

權さん

お前どうした、工場から暇が出たのか

お喜乃は悲しさうに權の顔を眺めてゐる

權もお喜乃の顔を眺めてゐる

お喜乃の目からはらららと涙が零れた

權さん、工場やめてどうする

嘘だ、嘘だ

お前大坂へ歸へつちやんだらう

お喜乃はほろ／＼聲になつてゐる

夕焼の空は一面に赤く燃え立つてゐた

權は何んにも云はずに下を向いて立つてゐる

權さん、お前、大坂へ歸るなら

わたしも、一所に連れてつてお呉れな

又してもお喜乃の聲は顛えてゐる

お喜乃は夕方になると赤い花簪はなかんざしをさして、酒場の前に立つてゐたが
權はそれつきり遂ひぞ酒場に来こなかつた

忠義の犬

日比谷公園の

廣ッ場に

編みあげの赤い靴はきを穿はき

祖母おばあさんに連れられて

美晴子みはるこさんが遊あそんでる

浅い弱い春の日は

鏡のやうに晴れてゐた

中學生が五六人

テニスネットを引つ張つて
組に分れて遊んでる
軽くボールはぼん／＼と
向ふにこつちに飛んでゐた

祖母おばあさんは、遠くの方はうへ退ひつ去まつて
腰をかゞめて見せてゐる

テニスコートの

向ふから

足の太よい、毛けの長ながい
強つよさうな

犬がさつさと歩あつて來た

美晴子みはるこさんは、活動の『忠義の犬』を思ひ出し
丸い目をして見て居つた

あの犬も忠義の犬になるか知ら

同じやうに耳も垂れてゐるし

口も大きいし――

美晴子みはるこさんは

目をはなさずに眺めてゐる

中學生のラケットが何なんんな途端はつみかぐんと來て

犬の後に落つこちた

犬は走つてラケットを

口に銜へて立つてゐる

美晴子さんは

小さな聲で祖母さんに

『忠義の犬』の話をした

小さな出来事

足の短い狛犬はポチに噛ませてやりませう

糸のたるんだ風船と空気のぬけた護謨球はタマに噛ませ
でやりませう

弾機の廻らぬ自動車は銑葉の臺へ載せたまま馬車に纏か
せてやりませう

翼のゆがんだ木兎は牛に踏ませてやりませうか、馬に踏
ませてやりませうか、うしろの沼へ捨てませうか
飛べなくなつた飛行機と共に窓から投げませう

硝子がらすの中の人形も明日はお暇いとまやりませう
何なにつかの島へ着くように
島の人形になるように
桐の小函に帆をかけて——大川の水に流してやりませう

蝙蝠 蝙蝠

蝙蝠かろうりよ、蝙蝠かろうりよ
井戸端に蚊柱かばしらが立つてゐる
早く来て喰はないか

蝙蝠の家は何處だ
山か里か
何故咄なせはなさぬ

蚊柱が立たば
迎むかひに行くぞ

すぐに来て喰へよ

呼んでも、呼んでも

蝙蝠は居ない

臍をまげて隠れてゐる

臍をまげた蝙蝠に

蚊柱は喰はせるな

早くバケツで水かけろ

螢の親父おやぢが飛んでゐる

蚊柱が立つても

蝙蝠に咄すな

呼んでも呼んでも来ない

蝙蝠が来たなら

跣足はだしになつて追つ蒐かけろ

縁 側

彼はお針をしてゐる妻君さいくんに

爪の伸びた手を出して

鋏を借せと云つた

鋏は妻君さいくんの膝のあたりにある

若い妻君は

彼の手を眺めるやうに見て

笑ひながら

鋏をとつて渡した

彼は日の當つてゐる縁側みくらに胡座をかいて

パチリ／＼切り初めた

爪は遠くまで飛んで

皆んな庭の上うへに落ちる

妻君さいくんはそつと彼の後うしろに来て

顔を覗いてゐた

彼は爪の奇麗になつた手を出して見せた

若い妻君さいくんは黙つて立つて笑つてゐる

わしの隣人

彦兵衛

彦兵衛が、家の前の畑に
蘿蔔だいこんの種を蒔いてゐると
郵便配達が来た

彦兵衛は汚れた手で
葉書を受け取つて眺めてゐる
配達は行つて了つた

電車の車掌に及第した
東京の悴せがれからの葉書だ
彦兵衛の顔はにこ／＼した

圍爐ゐろり裡の中に
麥鍋むぎがが
泡立あぶくたつて煮え零こぼれてる

お霜

お霜が畠ひがたらいもに馬鈴薯じゃがたらいもを掘つてゐると
馬を牽いた男が

弄戲からかつて通とほつてゆく

お霜が土手に足を出して休んでゐると

前さきの男が馬を牽ひいて歸かへつて來た

また弄戲からかつて通とほつてゆく

お霜がもう歸らうとすると

藪くさの中に

男は首を出してゐた

留 さん

東京で流行はやる——サイノロジーと云ふ

田舎にはない新言葉

西洋の煙草の名でもあるか知らと

留さんは思つてゐた

留さんが田うなひに出て行つた後あとで

頬ほの赤い嬢ぢやうが長々ながくと晝寝ひるねをしてゐる

ポーリン衝つきの若い監督は

サイノロジーと云つて笑つて行く

留さんは解げせずで解げせずで堪たらない

その晩、夕飯を喰くひながら嬢ぢやうに咄はなした

姉は飴菓子あめくわしを嚙かりながら
これも解げせずで——首くびを枉まげた

お 艶

お艶つやが風呂にはいつてゐると

若い男が

だましに来た

小さな聲でだましてゐる

お艶がさぶり湯をかけてやると

男はうろくくしてゐたが

裏から

すーつと逃げて行つた

馬は厩うまやに

馬堰棒うませんぼうを

がらんくくと鳴ならしてゐる

天あまの川がはは北から西へ流れてゐた

六 藏

六藏が家の前に立つて

田の稻を眺めながら

群雀のことを考へてゐると――

群雀の一團が飛んで来て

稻の上に

かぶさるやうに下りた

六藏は駈けて行つて鳴子の綱を引つ張つた

群雀はバット飛び上つて行つて了つた

こんな日が幾日も續いた

田に稻がなくなると群雀は來なくなつた

六藏は何んにも考へずに

寝そべつて煙草を吹かしてゐる

米 松

米松が鋤を擔いて野良から

晝餉に歸つて來た

裏戸が開けつ放しになつてゐる

鶏が竈の上へあがつて

鍋の中から

麥飯をつつき散らして喰つてゐた

隣の金きんが家に小間物屋が来てゐる

嬬かゝるの笑ふ聲が聞えた

米松は忌々いさくしげに泥手で煙草を吸つてゐる

嬬かゝるは西瓜すくわを喰ひながら

帯あはひの間に巾着きんちやくの紐ひもをぶら下げて歸つて来た

鶏が厩の前へ駈けて来て立つてゐる

娘と劉さん

I

娘

劉さん

赤ん坊が生れたならばどうしませう

何處へたのんで育てませう

劉

ワタシ ワカラナイ アナタ スル ヨロシ

娘

横濱の叔母おばさん所へ遣りませう

新しい一袴ひとつみの一ひとつも着せて遣りませう

II

娘

叔母さんに断ことばられたらどうしませう

劉

ワタシ クニ トホイ ワカリマセン

娘

悲しいけれど捨てませう

顔の見えない闇の晩

ミルクの管くだを嘔くませて——公園のベンチの上に捨てませ
う

III

娘

お月夜の晩であつたらどうしませう

お月夜が続いて居たらどうしませう

育そだてませうか捨てませうか

劉

ワタシ ニホン タツ アナタ タノム

娘

薄情はくじやうな、薄情な劉さん

思ひ切つて——悲しいけれど捨てませう

ベンチの上に青々あざくと月がさしたら泣くでせう

わたしの顔を屹度きつと眺めて泣くでせう

劉さん

劉さん

その時のわたしの心はどんなでせう

磯の上

親戀しがりの子雀よ

親が戀しく

海へ來たのか

海へはいつて蛤はまぐりに化つて了しまつた親雀は

お前のことは

もう忘れてゐるぞ

幾いくら待つてゐても

元の親には逢はれないのだ

歸れ、歸れ

海の端で日が暮れたら

子雀よ

ほんたうにはぐれ雀になつて了しまふぞ

親の古巢に

妹はどうした、姉は居ないか

もう日は山から暮れて來くる

海鷗うみどりよ

子雀は磯にとまつて動かない

だまして山へ歸さぬか

百姓の足

百姓の足は怖いから

見たら逃げろと

親蛙が咄して聞かせた

子蛙は毎日

畔あきの上に匍もひ上つて眺ながめてゐたが

百姓の足は来なかつた

ある夕方

子蛙が沼の端はたで遊あそんでゐると

百姓が鋏さきを擔かいてやつて来た

百姓の大きな足が

子蛙の後うしろから

ずしん／＼と地響ぢひびきを打うつて歩いて来る

子蛙は堪たらなくなつて

沼の中に飛び込んで顛うえ顛うえ隠かくれてゐた

百姓はずん／＼行いつて了しまつた

子蛙が眼ひるも子菜もの莖くきに捉つかつて泣ないてゐると

親蛙は田の中から跳はねて来て

一所いっしょに連れて歸つた

怖い百姓の足が毎日田の中に這入はいつて來た

百姓はたうとう子蛙の居所ゐどころまでも

跡方あとかたなしに耕して了しまつた

それでも子蛙は生れた田の中が

自分の家いへだと思つて居たら

皆みんなな怖い足の百姓のものだと親蛙に聞かされた

手

若い女は

水菓子屋の表おもてに立つて

パイナップルを買つてゐる

若い男は

店みせの中にはいつて

パイナップルを買つてゐる

男が取り次いでくれた

パイナップルを受けとるとき

女の手が顫えた

男の手

女の手

女の手は顫える

畑 ン 中

(ある農夫の歌の VARIATION)

眞晝間まっひるまでごわせう

畑はたけ中に、田鼠むらもちが一匹

班犬ばんけんに掘りぞべられて

イヤハヤ

むんぐらむんぐら居ゐやあした

畑の土は、開闢かいびやくこのかた、黒いもんか

ごなもんか

眞まことの所、鳥に聞いて見やあすべい

畑はたけ中なかは、青空あそら天上てんじやう、不思議ふしぎはごわすめえ
喉笛のどふえ鳴ならした、ケーケーケー

鶏かしはが走はつた

こりやまた事ことか魂たまげ消拂はらつて居をりやあした

蜻蛉あけづが一匹

追おつかけ廻まわつた、啄つくわく

ぶつ飛びあがつた、飛とんだわく

蜻蛉あけづは御運ごうんでござりあした

地主ぢぬしさま様の一人娘ひとりむすめが

娘むすめに二種ふたいろ何處どこにごわせう

どこの詰つまりが

エヘン

孕はらみ女むすめになりやあした

畑はたけ中なかの豆まめ中なかの花はな何なになもんだ

朝あつぱらから何事なにごとぶたずに

べろりと咲さいてござりやあす

山 火 事

野兎の子と雉きりの子と住んでる山が山火事だ
早く逃げぬか
焼け死ぬぞ

先刻さつき鳴き鳴き雉の子は
飛んで逃げた

野兎の子はごうした

山の上に走り腐くさつて逃げたのが
野兎の子でなかつたか

あれは宿やどなしの山やま黽いたちだ

黽さきだと鼻はな先さきが黒い筈だ

黒いとも、黒いとも

眞黒まっくろだ

駈かけてつて見ろ

山一面に火の海だ

逃げ道がなくなる

野兎の子はごうした

山に居るのか居ないのか

息を切つて逃げて来た

何方の方へ逃げてつた

雉の子が飛んでつた山の方へ

夢中になつて走つたぞ

己の家

一 その頃

己が東京から歸つてゆくと

鶏小舎の側に

無花果が紫色に熟してゐた

己の家の穀倉には

米と麥が

向ひ合つて重ねてあつた

己は脊戸の杉山に

懸巢かけすが来て鳴くのが
うれしくて堪らなかつた

已おれか馬に乗つて野にゆくと
頬白ほくしろは
藪の上に囀つてゐた

已おれは座敷の丸窓を開けて
紅あかい芙蓉ふようの花を眺めながら
毎日、本を讀んで遊んでゐた

丁爺ていぢが餅を搗いて持つて来て呉れた

已おれが飛行機の話をする
ほんたうとは思はずに歸つて行つた

已おれは卷蓑シガを吹かしながら
村の子供等を集めて
庭の植込の中を歩き廻つて遊んだ

已おれは日暮方になると
裏の田圃の中に立つて
パースの詩の純朴ははらに微笑んでゐた

已おれは百年も二百年も

斯かろして生きてゐたいと思つた

二 篠 藪

蝸牛でいぢしよ

黙だまり腐くさつた蝸牛でいぢしよ、渦うずを巻まいてゐる蝸牛でいぢしよ
何なにが戀こしい

篠藪おれに

さら、さら、さらと雨が降る

夢現ゆめうつしに

己おれは暮くらした

蝸牛でいぢしよ

己おれに悲かなしいコスモスの

花はなと花はなとに雨あめが降ふる

もう、己おれの家うちは最終さいしゅうだ

蝸牛でいぢしよ

田いも賣うらう、畑はたけも賣うらう、

篠藪おれに

さら、さら、さらと雨が降る

三 霜 の 朝

厩うまやの前まへの葱畑ま葱に霜しもが眞白まっしろに降ふつてゐた
己おれが顔かほを洗あつてゐると

鵜が来て

南天の實を食つてゐる

己が賣つて了つた馬を

博勞が下駄を穿いて牽きに来た

馬は博勞に牽かれて門を出ながら

悲しさうに厩の方を振り向いて見てゐた

己は門の外まで駆けて行つて見た

冷たい朝日がさしてゐる

田甫の中を

馬は首を垂れて博勞に牽かれて行つた

己は茫然として縁側に腰を掛けてゐた

鵜が南天の木から

圍垣の椿の木へ飛んで行つて

己の方を向いて鳴いてゐた

己の家の圍垣は櫳の木を賣つて了つてから

ほんたうにみそぼらしくなつて了つた

緑青の食んだ銅の門の垂木から

霜解の雫がじたゞと落ちてゐる

四 何處へ

己おれが賣つて了しまつた田の中で
水鶏くひなが鳴いてゐる

己おれは悲しくなつて田の方ほうを見ないで通とほつて來た

元己もとおれが家の畑の中に

青々あさくと麥そばが育つてゐる

己おれは悲しくなつて畑の方ほうを見ないで通つて來た

己おれが借金かりの爲めにとられた杉山が

眞黒になつて茂さかつてゐる

己おれは悲しくなつて山の方ほうを見ないで通つて來た

己おれは悲しくなつてもうこの村には居られない

己おれは何處どこへ行かう

何故なぜ己おれは死しねずに

この村に居るだらう

五 暗い心

己おれが持つてゐた亡父おやの形見かたみの煙草入たばこいりを
質屋しちやの隠居かくいが

毎日持ち歩いて吸つてゐる

己おれは、それを見るたび胸むねが一杯いっぱいになつた

己おれが着てゐた夏外套なつインズを

古着屋の婆おばあが

毎日負ひ歩いて見せてゐる

己おれはそれを聞きたび胸むねが一杯いっぱいになつた

己おれの家で飼かつて置いた鶏けいを

己おれが賣うつてやるこ

すぐ縊くられて喰くはれてゐる

己おれは鶏けいの羽根うねを見て胸むねが一杯いっぱいになつた

己おれはもう希望きぼうも欲ほもなんにも無なくなつて了しまつた

生きてたくも死しにたくもなんともない

この村むらにさへ居いなかつたら

己おれの心こころはのんびりしよう

六 風が吹く

己おれの家のうしろの沼ぬまに風かぜが吹ふく

實じつにしみく風かぜが吹ふく

見れば見るほど

風かぜが吹ふく

山やまの方ほうから風かぜが吹ふく

廣ひろい河原かはらの

砂利石ざりいしに

風かぜは鳴なり鳴なり吹ふいて來くる

己おれが生れたこの村の
井戸ゐどの釣瓶つるべに
風が吹く
風は鳴り鳴り吹いてゐる

七丁 爺

己おれは少年の頃
穀倉こくぐらの廂むらへおがつて雀の巢こはを毀したことを覚えてゐる
巢こはを毀された親雀は、日が暮れて了つても廂の上にとまつ
てゐたことも覚えてゐる
穀倉は田を賣つて了つた同じ年に己が賣つて了つた

穀倉の跡には青い蓬よもぎが生えてゐる
己おれは庭へ出て見るたび熱い涙が胸にこみあげて來た

己おれは門の屋根の銅あかねを剝はがして賣らうと考へた
己おれは靴はを穿はいて古金屋ふるかねやのある町まちの方へ出掛けて行つた
途中で丁爺ていぢに遭つた
己おれは仕方なくて銅あかねの話をした
『お前まへさまの親御おやに御恩ごおんは返えせねえから、せめて——
お前まへさまのお家でも繁昌はんしやうさせてえと——鎮守様ちんしゆさまにも御願ご願
をたててゐるでがす——』
丁爺ていぢは悲しい顔をして己おれの顔を見てゐた
己おれもほんたうに悲しくなつた

己おれは古金屋へ行かずに歸つて來た

己おれは庭木を賣らうと思つて植木屋をよんで來た

丁爺ていぢいが來た

丁爺ていぢいの目には涙が一杯に浮んでゐた

己おれは堪らなくなつて家の中に駆け込んで一人で泣いた

西風が稻の上に毎日吹いた

丁爺ていぢいは己おれの家の庭へ來て

いつも悲しい顔で立つて眺めてゐた

己おれは丁爺ていぢいに

古くから己おれの家いへにあつた紫檀したんの蓋ふたの湯呑やを與つた

『お前さまの形見でがな——』

丁爺ていぢいも己おれも一所いっしょに泣いた

百姓はうれしさうに馬を牽いて歩いてゐる

己おれに樂みのない收穫の秋がたうとう來た

己おれは朝の未だ薄暗うすくらい内に

ズツクの靴かばんを抱かかひて汽車に乗つた

腰の屈かむんだ丁爺ていぢいは改札口の欄干てすりに伸び上り伸び上り

『お前さま、御無事で暮らして下せえ』と己おれに云つて泣いてゐた

八 頰 白

己おれが野へ行くたび

藪の上にとまつて鳴いてゐた

頬白よ

己おれはお前のことをほんたうに懐なつかしく思ふ

己おれはこの村に家も屋敷もなくなつて了つた

己おれは東京の友達を便たよつてゆく

今日は別れた

頬白よ

お前は達者たうしやでゐて呉れよ

己おれは東京から

二度この村へ歸つて來られるかどうか

今のところでは解わからない

歸つて來こないとしても

お前はいつまでも達者でゐて呉れよ

己おれが東京へ行つて

何處どこに住むようになるか未だ解まらない

本郷に住んでも淺草に住んでも

この村のことは忘れて了しまつても

頬白よ

己おれはお前が懐なつかしくて忘われられない

畑の麥が黄ばんでも、田の稻が黄ばんでも
他人のものは喰はないで呉れよ

この村には

もう己の田畑はない

お前は何を喰つて暮らすだらう

蟲でも拾つて喰つて生きてゐて呉れろよ

己が東京にも生活かねて

東京に居ないと聞いても

頬白よ

決して悲しんで呉れるな

お前は達者でいつまでもこの村で暮して呉れろよ

九 猫 よ

東京に来て見たものの——生活^{くらせ}的^{あて}はない
郷里^{くに}に家でも——あるではなし

どうしよう

木更津^{きさらづ}に——お前の伯父がある筈だ

己^{おれ}も一所^{いっしょ}に

連れて行つて呉れぬか

猫よ

十 夏

卯の花が咲く

杜鵑が啼く

夏が来た

沼の中に菖蒲の花も咲いてゐる

どつちにしろここには永く居られない

己に約束の夏が来た

この家は明日にも空けて返さねばならぬ

己に餘祐の金があらば

せめて夏中でも

ここの葛飾で暮らしたかつた

己はもう諦めて神戸へ行かう

己がたつて行つた後で

誰が来てこの家に住むだらう

自分の家を失て了つた己は

他人の家でも住み馴れた家は戀しい

一生涯借家住ひで暮らさねばならない己は

旅鳥のやうだ

去年の夏は東京に居て今年の今は葛飾に居る

他人の知らない涙が

己の胸にはいつも一杯に溜つてゐる

これが自分のものと定つた家があつたなら

己おれはどんなに嬉しいだらう
また住み馴れたこの家をたつて
知らぬ他國に行かねばならぬ
己おれに悲しい夏が来た

大正八年六月七日印刷
大正八年六月十日發行

定價六十錢

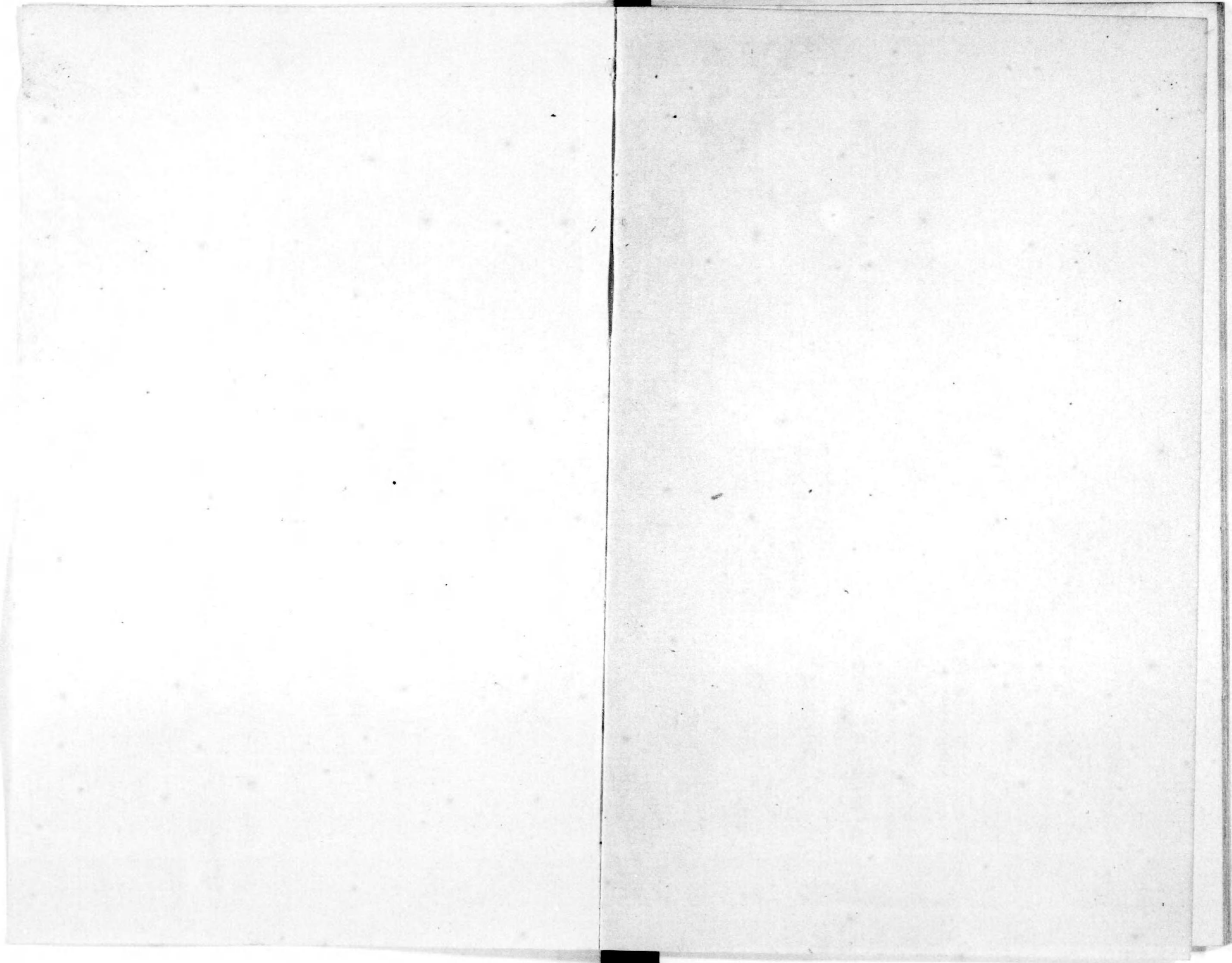
著作者 野口雨情

發行者 山野爲次郎
東京市京橋區銀座四丁目四番地

印刷者 野口吉太郎
東京市麹町區有樂町一丁目四番地

印刷所 洋洲社
東京市麹町區有樂町一丁目四番地

發行所 銀座書房
東京市京橋區銀座四丁目四番地



181
179

終

